



TITLE:

『スラヴ諸語語源辞典』について

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. 『スラヴ諸語語源辞典』について. ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 1998: 705-700

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65788>

RIGHT:

『スラヴ諸語語源辞典』について

“Этимологический словарь

славянских языков” п/р. О. Н. Трубачева. 1960.¹

♣ 1786年、英国のウィリアム・ジョーンズは、「アジア協会」刊行の『アジア研究』誌に梵語について論文を寄せ、これが動詞の語根においても文法形式においても、ギリシア語及びラテン語と「偶然生じたとは考えられない程よく似ている」ことを指摘し、これらが「恐らくはもう存在しない、ある共通の根源より発したものであることを信ぜずには居られない」と述べた。

「比較方法」による「祖語の再建」という考えはここに端を発するのであるが、その後の比較言語学の発展の過程において、例えば彼のシュライヘルのように、自己が再建し得たと信ずる「祖語」によって寓話をものするというエピソードさえもみられた。

♣ 今日この種の試みを信ずるものはいないが、その理由の一つに、下位言語の比較によって再建された諸要素が、同じ時期に共存していたとする保証がないということがあった。世に比較方法の限界と呼ばれていたものである。これは個々の星と地球との距離が実際にはさまざまであるのに、距離が大きいためすべての星が同一平面に並んで見える、という事情によく似ている。

例えばギリシア語 *phérō*、ラテン語 *ferō*、スラヴ語 *berǫ*、梵語 *bharāmi* 等から **bher-*「運ぶ」を再建し、同様にして語尾 **-ōm* < **-ōmi* を再構成したとしても、これだけでは本当に、**bherōm* という形が祖語にあったかどうかは厳密には、わからないのである。

従って個々の要素だけではなく、要素間の関係を「再構成する」ことが必要となるが、これは言うべくしてしかく容易なことではない。類型学、言語地理学をはじめ関連する分野のあらゆる知識が動員されねばなるまいし、何よりも体系的に考える態度が必要となってくる。

♣ ところでロシア語の語源辞典は、著名なものだけでも、А. Г. Преображенский のもの、Sadnik-Aitzetmüller のもの、М. Фасмер のものなどが挙げられるが、これらは何れも要素の再構成に留っていたといえる。起点となるのはあくまでも現代ロシア語だったのである。例えば *белый* は古ス *ВѢЛЪ* であって、梵 *bhālam* 「輝き」、*bhāti* 「輝く」、希 *phálios* 「明るい」と同根であることが述べられており、*апрѣль* を引けば、拉 *aprilis* が希 *apríli(os)* を経て借用されたものであることが示される、といった風であった。

♣ 今回の『スラヴ語語源辞典』を繙けば、まず気がつくのは、見出語がラテン文字で綴られ、星印がついていることである。この星印は前記シュライヘルの創案にかかり、その後

¹ 『窓』 14号 1975年9月 60-61頁。

慣用となったものであって、「再構成された」形を示している。

これを要するにこの辞典はスラヴ祖語における状態を示すことを主眼としたものであって、出発点はスラヴ祖語なのである。ここに本書が従来の語源辞典と異なる最大の特徴がある。これをあえて「スラヴ祖語語源辞典」としなかったのは編者によれば、収録された形が実在のものであるとする誤解を避ける為であった。

出発点をこのようにスラヴ祖語におけば、後代の借用語は総て除外される。更に個々の要素だけでなく、祖語に存在したと推定される語形そのものを再構成せねばならない。「要素間の関係の再構成」である。例えば *asenъ (トネリコ) だけでなく、*asenika, *asenikъ, *asenišče, *asenovъ (jъ), *asenъcъ, *asenъje のような派生語にも、それぞれ一項を建てているのは、このような考慮による。従って我々はこの辞書から、祖語における語彙の状態、当時の語構成の仕方について、詳しい情報を得ることができる。

♣このような野心的な試みの基礎になっているのは、序文にもあるように、スラヴ語が決して等質のものではなく、既に方言的に複雑化していて、後に分化する諸語が祖語の枠内で自立性を獲得していた、という認識である。すべての下位方言についてまず共通のものを求め、これに基いて更に一般化するという、「内的比較」の方法が、ここから必然的に結果する。このような手順を経てはじめて、スラヴ語派以外の言語とも、語形全体の比較が可能となるに違いない。

♣例えば形容詞の派生素素 -ов- は、従来 *dom-eu-os > *domovъ のように接尾辞 *eu による U 語幹名詞に母音的要素が附加されて成ったものであるから、これ以外の語幹に -ов- がついて派生されたものは、後代の類推によるものとされていた。しかし *asenъ — *asenevъ, *berza — *berzovъ のような形が内的比較によって措定され、また *asenevъ と構成を同じくする拉 orneus < *oseneus の存在、ウンブリア語 Fisouie、拉 Salluvius のように *-eu- を *-io- で延長した形に平行するトラキア語 Berzovia の存在などから、スラヴ祖語において *-ov- が形容詞派生素素として機能していたと結論できるといふ。

♣この方法がもし成功すれば、方言分化の契機を含みつつ統一性を保つスラヴ祖語の姿が、その動態において把握できると期待される。これは祖語の語彙、語構成、更には形態論のような「共時的」研究に貴重な情報を提供するだけではなく、祖語がどのようにして下位方言に分化していったかを明らかにする展望をも開くものとなるに違いない。II 巻以降の刊行を待ちのぞむ所以である。

Этимологический словарь славянских языков. Праславянский лексический фонд. Вып. 1, (A-*besědъlivъ). Под ред. О. Н. Трубачева. Академия наук СССР. Институт русского языка. «Наука», 1974, ¥ 1.520.